



2004年(平成16年)
2月号(No. 705)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●http://www.jac.or.jp

e-mail●jac-info@jac.or.jp

目次

山岳トイレ改善の最新動向	1
100周年ニュース	3
再び冬のローツェ南壁へ	4
報告	6
事業・懇親山行／自然保護・自然観察会／丹水会・第45回集会／二火会・「イベリア半島山の旅」を聴く	
海外の山	8
支部だより	9
山梨／山陰	
東西南北	10
「白瀬中尉の南極探検」特別展／草創期山岳会ゆかりの横浜を歩く	
Climbing & Medicine	30
図書紹介	12
図書受入報告	14
新入会員	16
会務報告	18
INFORMATION	19
ルーム日誌	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

山岳トイレ改善の最新動向

森 武昭

■山岳トイレ改善の動き

山岳トイレ改善の動きは、平成9年頃から活発化した。本会でも平成12年11月に科学委員会と自然保護委員会が、シンポジウム「登山者の立場から山のトイレ問題を考える」を開催した(会報663、668号参照)。また、平成14年7月にはトイレマナーノートを作成し、広く配布した。

このような改善の動きを促進した背景には、環境省が平成11年度から山岳トイレの整備に半額補助を実施したことがあげられる。下

表に示したように、この5年間で57か所、9億3千万円を補助したことになる。したがって、山岳トイレ改善のために総額約20億円が使われたことになる。この数字は、一登山者としては大いに考えさせられるところである。平成16年度予算でも1億円が計上されている。そして、これをサポートするよう、一部の地方公共団体も補助金を拠出している。例えば、富士山の静岡県側の3つの登山ルートでは、平成14年度から3年間で全体的なトイレを環境に優しい方式に改善するべく、原則として、環境

省50割、静岡県2割、地元のみ町村2割、山小屋10割の割合で費用負担し、整備を進めている。このような補助金という形で行政が積極的に動き出したことは評価される反面、新たな問題も提起されている。

■技術的課題と対応

そのひとつに、技術的な課題があげられる。山域外への搬出を除くと、現場で行うし尿処理としては、生物、化学、土壌、乾燥・焼却、コンポストといった方式がある。いずれも原理としては難しくないのであるが、山岳地域という特殊性が加わった途端に困難さが生じる。山岳地では基本的にインフラ(道路・水・電気)が整備されていないうえに、気象条件が厳

年 度	補助金総額	対象山小屋数
平成11年度補正予算	1.3億円	10か所
平成12年度補正予算	1.5億円	8か所
平成13年度当初予算	0.5億円	2か所
平成13年度補正予算	4.0億円	20か所
平成14年度当初予算	0.5億円	4か所
平成14年度補正予算	1.0億円	8か所
平成15年度当初予算	0.5億円	5か所
合 計	9.3億円	57か所

環境省・山岳トイレの整備補助額

しく、負荷条件（トイレの使用は、限られた時期、限られた時間帯に集中する）も多種多様なためである。したがって、技術的には保守面も含めて不安材料をかかえたまま導入が進められているのが現状である。

環境省では実用段階にある先進的環境技術を促進するために、その環境保全効果を客観的に実証する事業を試行的に実施し、環境保全と地域の環境産業の発展をねらって、平成15年度から「環境技術実証モデル事業」をスタートさせ、有識者による検討会を立ち上げた。そして、アンケート結果などから3つの課題が取り上げられ、そのひとつに「山岳トイレし尿処理技術」が採択された。

これを受けて、6月にワーキンググループが結成され（筆者が座長）、実証試験要項が決定された。次いで、8月に実証機関（都道府県と政令指定都市）を公募した結果、今年度は富山県に決定した。そして、同県では直ちに実証試験を希望するメーカーなどを公募した結果、立山一ノ越公衆トイレ（富山県所有で一ノ越山荘が管理）の土壌処理方式について試験するこ



立山一ノ越公衆トイレ

とを決定した。

そして、今年度は時間的な制約があるため、越冬に係した実験項目について（主に温度測定）のみ実施し、来年度に本格的な実験を行う予定にしている。また、同県では、さらにもう1か所別の方式について試験すべく準備を進めている。そして、平成16年度にはさらに他の実証機関を公募すべく現在作業を進めている。

今後、実証試験で得られた結果は、データベース化して公開することになっており、例えば山小屋

経営者がトイレを設置する場合、どの方式を選定すべきか検討する際などに役立ててもらうことになっている。また、メーカーが説明書などに記している性能が実際の山岳地域ではどのようなデータとなったかを定量的に明示することになっている（評価・認証は行わない）。すなわち、今回の試験は、得られたデータを公開することにより、ユーザーなどへ判断材料を提供することを目的としている。

このような技術的課題に関する本格的な検討が緒に付いたが、重要課題のひとつである「保守」については、最低5年程度の年数が必要であり、この点まで十分に検討できないのは残念である。また、今回は国（環境省）が実証試験を行うため、データの公開までであるが、実際には性能評価や立地条件などを考慮に入れた適応性などを明示しないとユーザーにとつては十分に役立たないのではないかと思われる。そのためには、行政機関から離れたNPOなどの民間組織がこの公表されたデータを基に専門家の意見を聞きつつ、ユーザーにとつて真の意味で有益な情報を提供できるようなシステムを構築していくことが肝要と思われる。例えば、筆者は自然エネルギー発電を専門としているが、山岳トイレ用電源として、過剰設備と思われる事例を見受ける度に、合理的なシステム設計の必要性を痛感させられている。

■その他の問題点

以上、山岳トイレ改善の動きを主に技術的側面から述べてきた。技術的課題を別としても、多額の税金が使われている現状、立派なトイレを整備しても使用する登山者のマナーが伴わなければ保守などで困難が増すこと（例えば便槽への異物混入が未だ多いなど）、保守に要する費用負担（チップ制から有料化へ）、オーバークースとの関係などの問題が生じている。また、現在は利用者の多い山域を中心に改善が進んでいるが、登山者の少ない山域や日帰り山行が対象となる山域の大多数では、トイレそのものが設置されていないので、登山者のマナーだけに依存していることを改めて認識する必要がある。

（JAC発行のトイレマナーノート参照）

「中央分水嶺踏査登山」支部の活動現況

中央分水嶺踏査実行委員会支部担当 藤本 慶光

創立100周年記念事業のひとつである「中央分水嶺踏査登山」は、全国の支部と首都圏に属する多くの会員が全面的に参画する画期的なものである。

会報『山』の1月号にその概略を紹介したが、すでに各支部においてそれぞれ活動を開始しているので、その現況をお知らせしたい。

●**秋田支部** 昨年9月28日に佐々木支部長以下15名の会員で秋田、岩手の県境の甲山分岐から峰越し林道まで踏査して、その山行報告書が昨年度の年次晩餐会で展示された。国土地理院の作成した地形図に書かれている「鹿子の山」という山名表示が実は「鹿の子山」であること、新たに作られた林道や、すでに使われてない廃道など地図上の表記を修正しなければならないことなど、多くの収穫を得た。

GPSによる位置測定とあわせて高度の測定もしたが、地図での高度表示と異なることもあり、GPSの精度を知る上でも有益であることがわかった。

●**北海道支部** この地域は広大で、4つのグループに分けて実施すべく計画を立案中であるが、積雪期、残雪期のほうが踏査が容易であるとの視点から、本年早々に2回のトライアルを実施した。1月2日から4日にかけて新妻支部長をリーダーとして3名が宗谷岬を出て宗谷川源頭134地点まで往復踏査、1月11、12日に新妻、西野の2名がトマムR136と中央分水嶺の交点から957峰までの6kmをスノーシューで踏査した。

●**東海支部** 和田副支部長を委員長とした委員会が結成され、数次の偵察、一部区間の踏査を実施した。今回の全体の計画では、必ずしも全ルートでの完全踏査にはこだわらず、行けるところは行くとの趣旨で取り組んでいるが、東海支部は担当区間の76kmの完全踏査を目指している。野麦峠から権兵衛平までを15の区間に分け、実施時期、リーダー、サブリーダーを決定して今春の残雪期を中心に各チームが踏査に邁進する。この企画を記念するペナントやTシャツも作成する予定である。

●**富山支部** 木戸支部長を責任者とした体制ができており、本年2月から4月までに5回の偵察調査、本踏査の日時と場所が決定した。

●**信濃支部** 中野支部長を委員長とした8名の実行委員会に発足し、具体的な実施計画を作成中である。

●**京都支部** 横田支部長が責任者となり5名の担当委員が決定した。

その他の支部でも相次いで担当責任者が決定、実施のための組織づくり、ルートの検討、実施時期の設定などが精力的に行われている。

●**首都圏** 全長6000kmに及ぶ中央分水嶺を全国の支部に踏査を実施していただくべく割り当てたが、支部に属さない首都圏在住者も参加できるように、首都圏の担当区間を次の15区間とした。すなわち、甲子峠から鳩待峠までをA区間からF区間の6つの区間の首都圏1とし、三国峠（高田）から三国峠（甲府）までをAからIの9区間にわけて首都圏2とした。この計15区間を支部での活動と同じように責任をもって実施していく母体として、日本山岳会の同好会に呼びかけることにした。

同好会には、同好の士が集まって特定の目的をもって活動する同好会と、従来あった同期会が発展的に同好会になったグループもある。1月26日にそれらの同好会の代表者に集ってもらい、計画を説明した。それぞれの同好会でどの区間を担当するかを検討して、希望区間を提出してもらい、委員会で調整のうえ決定することとした。

今後は支部における活動と同様に、責任者の決定、ルート、スケジュールなどの検討実施計画の策定を積極的に行っていただきたいと考えている。

今回の計画は、日本山岳会会員のできるだけ多くの方の参画を実現したいという強い願いにより策定されたものである。一般会員の方々も積極的にいずれかの計画に参加されて、日本山岳会創立100周年をそれぞれの想いで迎えていただきたい。

再び冬のローツェ南壁へ

日本山岳会東海支部冬期ローツェ南壁登山隊2003

隊長 田辺 治

今回、日本山岳会創立100周年記念事業として、冬のローツェ南壁へ再挑戦するチャンスを得た。再挑戦するにあたり、2年前の経験を踏まえて周到な準備を行い、本番の登山に向かいました。そして前回の最高到達点を越え、山頂まで標高差250mに迫りました。しかし残念ながらあと一歩力が及ばず断念しました。100周年記念事業のスタートをきる登山で、皆様の期待に応えられず申し訳ありません。『山』をお借りして概略を報告し、御礼に替えさせていただきます。

せていただきます。

今回登山隊員は少数先鋭の5名とし、まず秋に高所順応トレーニングのためシシヤパンマに向かい、10月14日、全員シシヤパンマ中央峰に登頂した。日本とカトマンズに分かれて休養の後、11月14日ローツェ南壁BCに入った。

19日より登山活動を開始する。前回の最高到達点である7600mまでは勝手知ったルートだ。22日、5900mのロックケープにC1を建設。28日、7100mのヒマラヤ壁を削ってC2を建設、そして12月3日、ユーゴスラビア隊がC4をおいた7300m地点に、ルート



山頂へ向かうクーロワールを登る。8000m地点
(中日新聞社提供)

作のための仮C3を建設した。壁のコンディションは良く、前回より落石の頻度は低かった。しかし上空から轟音とともにダイレクトに襲う落石が多く、回避不



← 最高到達点 8250m
← C3 7850m
← 仮C3 7300m
← C2 7100m
← C1 5900m

BCへ

ローツェ南壁全景(中日新聞社提供)

能な危険はいさかも減らなかった。

5日、前回の最高到達点を越え、9日、予定より低くなつたものの、7850m地点に待望のアタックキャンプC3を建設した。ここまです計算どおりスピーディーに登山を進めることができた。後はローツェ南壁を陥すまで波状攻撃をかけるのみ。必勝体勢に持ち込んだと思われた。

しかしローツェ南壁の本当の難しさを思い知らされたのはそれか

らであった。2001年の試みはプロローグにすぎなかった。落石と凍傷による負傷のため、シエルパたちの戦力は削がれていった。ルートはチェセンが登ったとされる岩壁を避けて右下へ200m下降し、山頂の左肩に突き上げるクーロワールへ入る。チェセンルートは岩壁の登攀が難しいうえ、稜線に出た後強風にさらされながら山頂まで長いトラバースをしなくてはならないため、冬は不利である。我々の選んだクーロワールは、

春と秋は雪崩の通り道となるため使えないが、雪が降らないプレウインターには絶好の登頂ルートになると思われた。

実際取り付いてみると、クローワールへ入るトラバースが悪く、クローワールの中も悪場が続いた。10日から15日にかけて田辺パーティーと北村パーティーが5回にわたる攻撃を行ったものの、山頂に届かなかった。最高到達点は8250㍎であつた。18日、最後の攻撃のため、田辺パーティーはBCからC1へ移動したが、アタック予定日前後に雪が降る可能性が高いとの天気予報を受けて、登山の続行を断念した。逃げ場のないクローワールで雪崩に巻き込まれる危険性が高すぎると判断したためである。

完登まであと250㍎、山頂は指呼の間であつたが、またしても雪辱を晴らすことはできなかった。

隊長 田辺 治 42歳
副隊長 鈴木 正典 42歳
隊員 北村 俊之 41歳
山本 茂久 35歳
千田 敦司 29歳

BCマネージャー

竹中 吾郎 43歳

連続講演会「語り継ぐ 黎明期の登山…それぞれの山」 第2回 渡辺兵力氏「山への想い・山に残した足音」

資料・映像委員会

渡辺兵力名誉会員(東京大学スキー山岳部OB)は、「山と人」を見つめるその目と豊かな感性で、数々の山に足音を残されました。

一ノ倉沢奥壁積雪期登攀、チャチャ・スプリ冬期初登行、第1次南極観測隊参加、東大のバルトロ・カンリ遠征、日本山岳会チョモランマ遠征など、数々の経験と実績は、登山史に刻まれております。

子供の頃に「山」と出会い、以後80年余り「山」とつき合い、その中で追い求め辿りついた「山」観とはどのようなものであつたのか……。

「山」を想うことと、「山」に登ることとを、それぞれの観点からとらえた独自の登山考に、今を歩む私たちは真摯に耳を傾けてみてはどうでしょう。

齒に衣着せぬ、聡明でありながら思慮深い魅力ある語りが、走馬灯のように駆け巡ることと思います。どうぞご期待ください。

日時 4月3日(土) 15~17時(入場は14時30分より)

場所 東京体育館 第一研修室

(JR中央線「千駄ヶ谷」駅下車1分 都営地下鉄大江戸線「国立競技場」駅下車A4出口前)

定員 120名(当日の受付、会員外の参加も可能、無料です)

申込み・問合せ 郵便、メール、FAXにて会員番号、氏名を記入のうえ

*奈良千佐子まで(150-0001 渋谷区神宮前3-29-11 FAX 03-3402-6014

メール mt.chisako@mbc.nifty.com)

*または、山岳会事務局まで(TEL 03-3261-4433・FAX 03-3261-4441)

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申込ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!



古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

100周年記念事業募金状況

(2004年1月30日現在)

●寄付者 2056人

●金額 623万7千円

会員の3分の1の方に募金をいただいております。引き続き皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

報告

2月 Report

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です

事業委員会

小春日和に恵まれた 懇親山行

今年の記念山行は、昨年の関八州見晴台の雪模様様の寒かった天気とは打って変わり、暖かな天候に恵まれた。まだ紅葉の残る高尾山に60名近くが参加。前日の晩餐会会場では足りなかった親睦をより深めた。

都民のオアシスと呼ばれる高尾山、お天気も良かったせいで9時には駅前には人で混雑し始めており、集合の10時にはなお一層の混雑の中、受付する人もさぞ大変だったかと思う。

先発隊は10時には頂上到着。さすがにまだ人も少なく豚汁を作る東屋を確保。ベテラン揃いの山岳会の方たち、11時前には第1陣が、

その後額に汗して続々到着。用意した70人分の豚汁が12時にはきれいになくなり、昨年参加人員が急に減ってしまい豚汁の処分に困ったのとは大違いだった。

全員集合の記念写真を撮影後解散、まだ残って宴会をする方、小仏峠の方へ向われる方等々初冬(晩秋の名残を楽しんだ)の高尾山だった。(山崎 浩子)

自然保護委員会

奥多摩の森 自然観察会

やや寒いが好天に恵まれた12月20日。森林インストラクターで地元の林業家でもある原島幹典氏を講師に迎え、奥多摩の森・自然観察会が開かれた。

スタート地点の奥氷川神社で、篠崎自然保護担当理事の挨拶の後、

原島氏より今日のコースの説明、境内の三本杉の話、巨樹と巨木の違いは？ 杉の木の穴を住居とするムササビの滑空能力の話等々、思わず講師の名調子に引き込まれる。今日のこれからが楽しみだ。

個人の繁栄だけでなく、地域単位の繁栄を常に考えていたという東京一の山林地主、木村家の墓前で、この地区の今昔について大変興味深い話を聞いた。薪炭から化石燃料に代わったことによる変化、材木中心で繁栄したこと、奥多摩湖の完成による様々な変化等の影響で大きく変わってきたことなど。伐採した後も植林をせず自然のまま放置された箇所、枝打ちのやり過ぎで根倒れして山が荒れている箇所では、山の手入れをただ単なる経済行為としてだけではなく、山のメンテナンスという面から見て、何をしたらよいのかとの問題の投げかけもあり、いろいろと考えさせられた。

羽黒三田神社での樹木探偵団・スギ、ヒノキ、モミ、ツガ、カヤの球果、苞鱗、種子などを探すゲームは童心に帰った楽しいひと時だった。実際に目で見、手で触れることにより知識が身に付くこと

を改めて実感した。

4軒の家がある農指集落を経て、以前は小学生の通学路でもあり、その昔は荷馬車も通ったという昭和25年頃までのメイン道路だったという山道を歩く。

原島氏の持ち山で、3年前に間伐した森での「当面手入れをしなくともよい森を目指して間伐した資源としての森と、環境にあった森、この両方の調和をどうとるかが難しい問題」との話は心に残った。

平将門伝説の残る城集落では、昔の畑の石垣が、数百年間自然環境に順応して自給自足の生活を続けてきた人間の強さを我々に教えてくれているように思われた。

この集落には4軒の家があり、その1軒の金子氏宅の庭先を借りて昼食をとり、1人住まいをされている85歳の金子さんから、栽培しているワサビの話を聞かせてもらった。

最後の絹笠集落は、7軒の家があったが、今は住んでいる人はいない。今にも崩れ落ちそうな廃屋での、大きく伸びてしまったスギの生け垣、カヤ葺き屋根、野菜保管室などの話は子供の頃の田舎の

生活を思い出させてくれ、興味深かった。

もう1軒の廃屋はすでに廃材が残らず土にかえており、現在問題となっている大量の建築廃材との大きな違いに改めて驚かされた。

日光白根山のシラネアオイ、丹沢のリョウブの樹皮など、最近では大菩薩峠周辺のヤナギラン、シモツケソウ等の鹿の害には複雑な気持を抱いていたが、ここでも鹿の害がひどく、植えた木にシエルトアをつけているのを見て、改めてこの問題の難しさを痛感した。

原島氏の山林に対する熱い思い、真剣なとり組みを聞きながら、群馬の実家の塀にブリキの板が貼ってあり、そこに「1年の計は元旦にあり、100年の計は植林にあり」という標語があったことを思いだしながら帰途についた。

自然を存分に楽しみ、自然と人間との深い関わりを改めて実感した大変素晴らしい1日だった。

参加者31名。(富澤 克禮)

丹水会

第45回集会

11月22日から23日、今回の集会

は、丹沢を少し離れて静岡県小山町にある「ろうきん研修所富士センター」を会場に開催した。

会場は箱根外輪山の北側で、金時山や、矢倉岳への最短コースに位置しており、1998年秋の集會もここを利用して、三国山、湯船山への山行を行っている。

この研修センターは、御殿場線足柄駅から20分ぐらい歩いたところで、富士を正面に眺められる閑静なところに建っており、研修室や宿泊室が完備して、集会にはうってつけの場所でありながら、連休の最中というのに我々だけの貸し切り利用が実現したのも、今のこ時世若い人には連休中の研修は受けられないかなど、変なところで感心をしてしまったのも、世代の違いなのだろうか。

恒例の講演は、この夏神奈川新聞社から「かながわのハイキングコース・ベスト50」を上梓し、今や会の中心的な幹事を努める山本正基氏の、出版にこぎ着けるまでの苦労や、失敗談などが披露され、その後夜更けまで懇親が続いた。

翌日は快晴、朝の赤富士のすばらしさに昨日の酔いもすつ飛んでみな表に飛び出した。

山行は矢倉岳。736mの足柄峠まで研修所の車が送ってくれるサービスがつき、名目上登る標高差はわずか114m。のんびりと2時間近くかけて展望のすばらしい山頂に着いたが、連休のためここは座るところを探すのに苦労するほどの超満員。要領よく場所を確保し、昼食をとって後は流れ解散とした。参加者 49名。

(古谷 聖司)

二火会

「イベリア半島山の旅」を聴く

12月16日の二火会は、中村純二・あや会員から標記のテーマで興味あるお話を伺った。昨年の5月26日から8月22日までの89日間、リスボンを起点にグレドス、ピレネー、カンタブリアなどの山脈を巡り、ポルトガル、スペイン、小国アンドラの各国を含む壮大な旅だった。スライドに次々映し出される美しい山岳風景が参加者を魅了した。

内外の静かな山を探訪している両会員は、行き交う人も稀でケルンだけを頼りにするようなピレネ

ーを中心とする山域を好まれ、この方面に十数回訪れたという。さり気なく淡々と語られたが、険しい岩場を攀じ、時に急変する悪天候に見舞われる。長い豊かなキャリアに支えられて初めて可能な山旅であろう。

両会員合わせて150歳を超えられたそうだが、ひとつ登るとまた登りたい山が見え、次の目標になるといふ。限らない探求心と行動力、ご夫妻の息の合った絆を感じさせられる夕べであった。参加者20名。

(砂田 定夫)

春のアンズの花と7,000m峰を仰ぎみる

桃源郷フンザと白い氷河と雪山展望ハイキング8日間

【発着地】東京(成田) 【フンザ2泊・グルミット1泊】

①3/19(金)発 248,000円 ②4/9(金)発 254,000円



国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 ①ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911

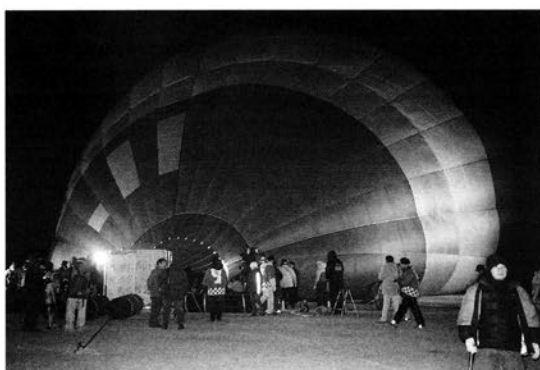
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

海外の山

ヒマラヤ越えから
太平洋横断へ

江本 嘉伸



通常の気球の8倍の大きさ! (1月27日未明、江本撮影)

熱気球の歴史は、1782年フランスの製紙業者、モンゴルフィエ兄弟に始まる。ふたりは紙で内張りしたリンネル製の直径10メートルの無人の気球を上昇させることに成功、翌83年には有人飛行にも成功した。

はじめは軍事目的で使われていた気球だが、現在では気象観測や大気

汚染調査目的でもおもにガス気球が使われ、熱気球は、スポーツとして利用されている。

埼玉県川島町の職員、神田道夫(54)は、その中でも「冒険」に踏み出したという点で異彩をはなつバルーンリストだ。26年前、テレビでニュージーランドのクック山を飛び越える気球を見たのが、大きな転機となった。79年には最高高度4400メートルを飛んで念願の「富士山越え」を、80年には熱気球「レインボー号」で北穂高岳山頂上3600メートルの高度を飛んで北アルプス越えを達成した。

神田の次の目標は、ヒマラヤ越えである。90年、チベット側からエヴェレスト越えを計画したが、風の状態悪く、6000メートルの高さで不時着支援の登山家たちは2日ばかりで現場にたどり着いたことがある。98年にはK2越えに挑戦、この時も風が吹かず、離陸もできずに断念した。

3度目のヒマラヤへの挑戦は、2000年10月、ナンガパルバット越えだった。コンビの竹沢広介(38)と「マンボウ号」で、パキスタン北東部、標高14000メートルのチラースを出発、分速2000メートルのスピードで上昇を続け、9000メートルの高度まで。途中、酸素圧力を調整する装置が故障し、飛びながら配管整備に追われ

た。しかし、念願のナンガパルバット越えを果たし、インド国境に近いデオサイ高原に無事着陸した。この壮挙と、それまでの努力に対し「2000年植村直己冒険賞」が神田に贈られたことは記憶に新しい。

栄誉の後、神田の挑戦の人生は続く。3年前から太平洋横断飛行を計画、高さ36メートル、最大直径26メートルという通常の8倍の「天の川2号」を作りて制作した。今回のパートナーは、将来の「宇宙への旅」を夢見る石川直樹(26、東京芸術大学大学院生、日本山岳会員)。1月27日未明、ふたりは栃木市の河川敷を飛び立った。ヒマラヤ登山とは違って、ジェット気流の吹き荒れる1月、2月だけが横断のカギだった。用意した燃料は60時間分。高度9000メートルまで上昇し、ジェット気流を利用して北米大陸まで飛行しようという計画だった。

結果は、雪雲にぶつかって中途断念。思わぬ降雪に大きな球体が雪をかぶって重くなり、燃料をかなり消費してしまっただ。残った燃料では太平洋横断の3分の2ほどで燃料切れになると判断、やむなく降下を決断し、出発から1600メートル西方の海に着水。洋上への着水は順調にいったが、直後危険な状態となった。球皮

の一部が着水後もふくらんだままだったため、ヨットの帆の役割を果たし、ふたりの乗るカプセルが水面を滑走し始めたのだ。……そして膝までの浸水。「ハッチを開けると水が入ってくるので必死で押さえました。一時は、これでダメか、と……」と、2月6日帰国した石川はふりかえる。

幸運にも救助活動は奇跡的に、と言いたいほど迅速に進んだ。海上保安庁のフアルコン機が引き返したあと、連絡を受けた海上自衛隊第2航空群第4航空隊(八戸)の対潜哨戒機がふたりの乗っているカプセルを発見し、上空を何度も巡回しながら近くを航行中のコンテナ船を誘導、ふたりはボートに乗り移って無事救出された。パスポートもカメラもパソコンも、全て捨てての生還だった。栃木市の川原で離陸の光景を見て、気球の大きさに驚き、この挑戦のすごさをあらためて感じさせられた。

「なんだ、あんな人騒がせなもの」という冷やかな反応を山の世界でも聞く。山岳遭難のヘリ救出と似て最後は「他力」に頼ったが、挑戦の志の高さという点では、近年の海外登山も、はるかに及ばないレベルである。

〈1月号2段4行目、一切は一切経に訂正します。〉

山梨支部

天城山

支部会員相互の親睦、体力測定を目的とした恒例の支部山行を11月29、30日、日本百名山の天城山で実施した。

古屋学而支部長以下15人が、季節外れの台風21号が近付く中をマイクロバスで出発した。予定では相模湾側の天城高原ゴルフ場から登り、万二郎岳、万三郎岳を縦走して、天城トンネルに下山する計画だった。事前の調査で、天城山は登山道の崩壊が激しく、全てのコースが入山禁止となっている事が判明。さらに台風の影響も考慮して八丁池往復、または天城峠越

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

えに変更した。

富士山ろくは土砂降りだったが、下田街道を国道天城トンネルに近づくころは、ほとんどやんでいた。気温が高く、軽装に雨具でトンネル北口から登山道へ。15分ほどで旧天城トンネルに到着。ここにはた交通量調査の職員は「天城山は通行禁止措置がとられています。ここから先は入れません」という。確かにトンネル脇の登山道入り口にはロープが張られていた。しかし峠までは登っているグループもあるとのこと、峠行きを決定。

ガスのかかる峠道を登り、15分ほどで峠着。一番古い峠はもつと西だが、ここからトンネルの反対側に下山した。

河津温泉の国民宿舎には早く着き、川端康成が泊まった福田屋、文学碑、踊り子が泊まった江戸屋などを見学した。踊り子は甲府の小学校に通い、父親である旅芸人の代表は甲府の生まれ。下田の宿は確か甲州屋といった。小説と山梨は縁がある。「踊り子の生まれを甲府にしたのはなぜだろう。実体験ならモデルは？」などと思いつながら、湯ヶ野の温泉街を歩いた。夜は温泉と懇親会。100周年

事業をどうするかなど、議論百出だった。

その夜は土砂降り。朝、宿の前を流れる河津川は、前日の清流とはうって変わって大増水。カモは姿を消し、濁流に流木が次々と流れていった。予定を再び変更し、帰りは観光に。浄蓮の滝などに寄って帰甲した。

(深沢 健三)

山陰支部

渡邊玉枝さん迎え晩餐会

当支部恒例の平成15年度年次晩餐会を、12月13日午後6時半から米子市の皆生シーサイドホテルで開催。会員24人が出席し、毎年招いているゲストには、前年女性最高齢でサガルマータ（エヴェレスト）に登頂した渡邊玉枝さんをお迎えした。

まず高田允克支部長が、先日東京で開かれた全国支部長会議の内容を報告。その中で、本会創立100周年記念事業のひとつとして行われる「中央分水嶺の一斉踏査」には支部全員で取り組むこととし、さつそく各自が希望する担当区間を申告した。続いて渡邊さんの挨拶があり、吉川暢一名誉支部長の音頭で乾杯し、懇談に移った。

なお迎えたゲストには、このところ毎年「山岳講演会」として公開による講演をお願いしており、4年目の今年も晩餐会に先立って同日午後3時半から同市の米子コンベンションホールで開催。渡邊さんが「63歳のエヴェレスト・女性の可能性とチャンス」と題して約1時間半にわたって話し、一般も含む43人が熱心に聴き入った。

また渡邊さんは翌14日、支部会員とともに雪の大山に登頂した。

(小椋 凱夫)



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここが得意です。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千代区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

「白瀬中尉の南極探検」特別展

大森 久雄

昨年10月下旬から1か月半、愛知県豊田市の郷土資料館で表記の展覧会があった。開催を知った時は会期の終わりに近く、時間が都合でくずに見送ってしまった。

白瀬蘆は秋田県の生まれ。周知の南極探検後は借金返済に追われ、晩年は縁故を頼って豊田市に住み、1946年、そこで亡くなった。いまその跡には「白瀬中尉終焉の地」の石碑がたつ。

さらに、1956年から始まった南極観測を西堀栄三郎とともにリードした永田武が愛知県岡崎市の生まれという因縁からこの展覧

会が企画されたという。立派な図録ができていて、生い立ちから南極探検、南極へという足跡をつぶさに知ることができる。

さまざまな企画展が日本各地で行われているはず。そうした情報と結果が局部的にとどまってしまふのは残念。

この企画展と図録についての問い合わせは、豊田市郷土資料館へ。(電話0565・32・6561)

草創期山岳会ゆかりの横浜を歩く 小島烏水、高野鷹蔵、ウェストン

関塚 貞亨

山岳会草創期の会員住所録によると、横浜在住の小島烏水は西戸

創立100周年記念事業にご協力を

部町898、高野鷹蔵は本町4-68に住み、ウェストンは山手の外人墓地の前にある山手聖教会牧師館に住んでいた。

緑爽会は、師走の12月12日、横浜にある山岳会草創期の人たちの旧居やゆかりの地を訪ねようと企画し、18人がJR桜木町駅に集まった。明治から大正4年までの横浜駅は桜木町にあった。

山岳会発足の1年前、雑誌『太陽』に発表された烏水の登山記に触発されて、武田久吉と高野鷹蔵は、この旧横浜駅から烏水の旧宅を訪ねた。また後に「悪沢岳の発見者」で親交のあった荻野音松がたどった道、その同じ道を歩いてみようというわけである。

10時に桜木町駅を出発し、地下道を野毛方向に抜け、高島町方向に500ほど戻ると紅葉坂にで、上りつめて、下るとバス通りになる。さらに伊勢町の停留所まで下って大通りと平行して伊勢町商店街が通っている。そこを行くと左手に税関官舎へ通じる坂がある。手前の狭い坂が官舎へ通じている

のだが、間違えて先にあるくらやみ坂を行き、再び引き返して官舎を見下ろす小公園に出た。

晴れていれば、富士山や丹沢の山々がビルにあいだから見えるのだが残念ながら曇っている。烏水が横浜正金銀行に勤め、898番地に自宅を構える前、幼少年期から青年になるまで、下級税関吏だった父上ら家族とともに山王山といわれた官舎に住んでいた。戦前は富士、丹沢、秩父、上州、日光の山まで見わたせたはずである。

烏水は山王山の官舎から野毛の老松小学校に通い、さらに港近くにあった横浜商業学校、関内の正金銀行まで歩いて通っていたのだ。西戸部898の旧宅は官舎の西

南、やや下った坂の途中にあった。現在はホーユウパレスとなっていて、3日後の15日から開通する小型バスの西戸部2丁目の停留所の標識が、この旧宅跡の前に立っていた。烏水の自宅跡まで桜木町駅から約1時間の道程であった。

小公園に戻り、税関長官舎と独身寮の間の坂を下り、八百屋の手

Climbing & Medicine · 30

高所の突然死

貫田 宗男

高所で病死というと高山病が原因と思うのが普通であろう。しかし、最近の例をみると、急性高山病とされる高所肺水腫や高所脳浮腫が死因とは思えない突然死がほとんどのようだ。

私の聞き及んだ限りでも、ネパールのアイランドピークのベースキャンプ(5100m)で突如、呼吸が荒くなり、4時間後に死亡した63歳の男性。アコンカグアではトップグループで登頂、下山中6800m付近で突如、背中の激痛を訴え3時間後に亡くなった67歳の男性。最近ではキリマンジャロでも5000mのキボハットを出発30分後に突如倒れこむように動けなくなり、2時間後搬出中に亡くなった60歳代の男性など、心血管系の障害によるものと思われる事例が目立つ。しかし遺族の同意が得られず、病理解剖されないため死因がわからないことも多い。また現地で解剖され、明らかに虚血性心疾患、脳血管疾患が原因と思われる場合でも、慣例からな

のか高山病、肺水腫として解剖所見に記された例もあり、正確な死因は究明されないことがほとんどである。

今日では高山病対策の知識、パルスオキシメーター、携帯加圧装置などの対策機器が普及し、さらに救助体制も整ってきており、経験豊富なリーダーやガイドが率いるグループで登山する限り、高所肺水腫や高所脳浮腫で亡くなることは稀になっている。

このような高所での突然死への対応策は、まず登山前の呼吸器機能検査を含む健康診断の徹底であろう。60歳を過ぎればなんらかの、しかも時には複数の慢性疾患を持っているものだ。そのハンディをいかに受け止め、コントロールしていくかが問題である。残念ながら海外の高みを目指す中高年には未だその自覚が薄い。「山で死ぬのは本望」では済まない。僻地の高所での死亡事故は周りに多大な迷惑をかけ、遺族にとっても納得のいかないこともあるだろう。さらに現場での対応策も重要である。エヴェレストのベースキャンプにおいてさえ、衛星携帯電話などの通信技術が発達した今、発症から2時間以内の医療機関への搬出も可能となっている。短時間で専門医療機関へ移送できるかどうかが生死、またその後の後遺症の軽重にもおおいに関わることになる。これからは高山病のみならず、登山者の中高年化に伴う突然死の問題も大いに検討されるべきであろう。

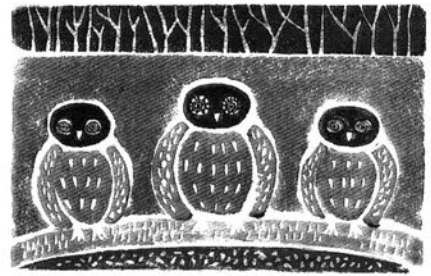
前の路地を200ほど上り返すと旧老松小学校(現在は中学校)に出る。子供の足で20分くらいこの八百屋は戸板の上に野菜や果物を並べていて、伊勢町商店街も同じだが、道を教えるのも人情も戦前がそのまま残っている。

小学校跡から野毛山公園を経て、再び桜木町駅に戻って、弁天橋を渡り、本町5丁目にある横浜正金銀行(現県立歴史博物館)の前に出た。烏水が勤務していた銀行だ。その先の4丁目にあった商人宿・高野鷹蔵旧宅跡は、左側の小豆色のビルあたりに思われる。

海岸通りに出て岡野金次郎が勤めていたスタンダード石油は探したが特定できず、1時半にようやく中華街で昼食、2時半に出発、元町から日本最初の西洋式公園を通るつもりが、その手前の坂を上がつてしまい、元町公園を左に見ながらウエストンが住んでいた山手聖教会の牧師館に3時過ぎに着、15年前の横浜ウエストン祭で知り合った山崎牧師は、平塚の教会に転動して会えなかった。

港の見える丘公園で解散。上高地の河童橋から横尾くらいの距離を歩いたが、よい旅であった。

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野溪石

Reinhold Messner/Horst Hoffer・著

Tim Carruthers・英訳

Hermann Buhl

—Climbing without Compromise—

ヘルマン・ブール (1924～1957) の伝記である。

ナンガパルバットの劇的な単独初登頂 (1953年) でヒーローとなり、さらにブロード・ピークの初登頂 (57年) を仲間3人と無酸素・高所人夫なしでやってのけた直後にチヨゴリザで消息を絶った彼には、ベストセラーとなった生前の自著『八千米の上と下』 (54年刊・横川文雄訳の日本語版は63年朋文堂刊) がある。

この生前自著が、当時の編集者

クルト・マイクスによる書き直しや加筆によってブールの実像から著しく乖離している、というのが両著者の主張であり、今回はブール夫人から開示された直筆の登攀日記と彼自身が山岳雑誌などに投稿したレポートなどを原文で掲載し (もともと本書は英語版であり、英訳者を介しているのがオリジナルとはいえないが)、著者の解説を加えている。なお、『八千米の上と下』のオリジナル原稿は残念ながら発見できなかったという。

とくに興味深い箇所としては少年時代の故郷チロルの山々での大胆な登攀、戦後復員直後の日記と数々の写真。幼少期、少年クライマー時代、第2次大戦中看護兵として出征した軍服姿の写真などもある。ナンガパルバット以降チヨゴリザでの遭難までは前記自著に含まれておらず、今回「スターとその死」と題した著者による解説に続いて「ドリュ西壁」「ブロード・ピーク」に直筆のレポートを掲載し、最後のチヨゴリザの部分ではブール夫人への最後の手紙、パートナーのデイムベルガーの手記などを引用している。

本文最終箇所はブール遭難の翌

年、京大隊の藤平、平井両氏がチヨゴリザ南東稜線に残されたテントから回収したブールの最後の日記の引用とデイムベルガーの短いコメントで締めくくっている。なお巻頭ではメスナーとヘフナーの両著者、ブールの長女クリムヒルト・ロンゼンブールおよび旧友ルイス・フィグルがそれぞれ愛情のこもった序文を書いている。興味ある方は『八千米の上と下』との読み比べも一興かと思う。

(越田 和雄)

The Mountaineers, Seattle 2000年 US\$ 24・95 204頁

4頁

『写真集 愛しき山稜 双六岳をめぐる』

小池潜・著

北アルプスの核心部、双六小屋をはじめ、他に3か所の山小屋を経営する小池潜さんは、山岳写真家としてもよく知られている。

初代、義清氏のご存命の頃から山小屋を手伝い、かたわら山の写真を撮り続け40年になるという。

87年に双六岳周辺の山々の四季をまとめた写真集『山の彩り』を

上梓、今回の『愛しき山稜』は前著を超えた作品集である。

残雪も豊かな春山、陽光に輝く山並み、ブナの新緑など端正な構図で切り取る。双六周辺の伸びやかな山稜、咲き競う高山植物など情緒的に夏山を描く。柔らかな光をたくみに捉えた錦秋の山々。雪化粧をした北アルプスの峰々をダイナミックに表現し、感動させる。全作品84点、4×5判の大型カメラで撮影、素晴らしいシャープネスと臨場感を見せる。

序文に山好きのドイツ文学者、池内紀氏。巻末に作品解説とエッセイ「カメラ片手に山暮らし40年」繊細な感性が捉えた双六岳の大自然「双六小屋をめぐる人々」などを収録。

(羽田 栄治)
2003年5月 山と溪谷社刊
112頁 3800円

『エベレストから百名山へ ヒマラヤから教わったこと』

重廣恒夫・著

1973年から1995年までの23年間に、実に11回のヒマラヤ登山に参加した著者は、この間、飽くなき登高意欲を持ち続けた。

「山登りの楽しみは自ら計画を作ることにある。地図やガイドブック、写真集などから目的の山を選び、そこに到達するための計画を作り、体力や技術を身につける。そういうプロセスを経てこそ、実際の登山において気象の変化の合間に垣間見えるすばらしい光景や、頂上で感ずる達成感は何ものにも代えがたいものとなる。」

またもう一つの大きな醍醐味は、人との出会いである。山の仲間だけでなく、これまで数多くの人々と山を通じて交流を持つことができた」(本書プロローグより)

これらの考えを多くの方々知ってもらいたいという思いから書かれたのが本書である。

第1章ではヒマラヤ登山での計画作りとその運行表、いわゆる「タクティクス」を、88年チョモランマ・サガルマタ交差縦走、91・92年ナムチャバルワ、95年マカルー東稜の3つの遠征を具体例として解説されている。

第2、3章は72〜85年にかけて7回のヒマラヤ登山の様子である。登山報告書に書かれていない、ヒマラヤと仕事の両立、高度障害の悩み、隊員間の交流、登山を通じ

て会った人々とのエピソードなどが書かれている。

第4章は日本百名山123日連続踏破。この計画は著者の職場アシックス・アウトドア事業部のブランド「タラスブルバ」20周年記念イベントとして採用され実行されたものである。

ヒマラヤ登山で培ったタクティクスが百名山にも活用され、生きる役に立ったようである。

踏破の全日程の様子、日々感じたことが日誌風にまとめられている。123日間に約1000名の人々と交流ができた。(茂見 猛)

2003年6月 光文社発行
318頁 新書版 820円

早川禎治・著

『カイルス巡礼 インダスとガンジスの内奥をめぐる』

本書はひと言で言えば「ヒマラヤ周行」、時には玄奘三蔵、川口慧海の後を追う壮大で心打つ冒険物語である。

旅はまずヒマラヤの西部周辺から始まる。この地域は東西文明の複雑な接点。ギルギットを起点にヒマラヤ、カラコルムの巨峰を飽

かず眺め、遺跡、旧跡を訪ねつつパミール、カシュガルそして広大なタクラマカン砂漠を横断してウルムチに達して前半を終わる。

次いでネパールに入り、33年前と対比して、今や聖俗渾然一体となったこの国を嘆きつつも、旺盛な登山、植物の深い造詣と自然への限らない愛情を謳い上げている。

続いてカトマンズから、本書の表題となったチベット仏教の聖地「カイルス巡礼」を敢行。天葬、五体投地と鬼気迫る信仰の世界の実態を余すところなく伝えている。最後にガンジスの河口に立ち、感

銘深い今回の長途の旅を一応終わる好著。必読の書である。

筆者は北海道生まれ、元高校教師、第2次野帳同人、本会会員であり『喜作新道ノート』『知床記』など多数の著書をもつ、真の博覧強記の人といえよう。(小倉 厚)

『新編 山の季節』

田淵行男・著

田淵行男の数多い著作はどれもいま古書店で高価である。2万円

▲世界的に類を見ない貴重な探検記録 禁断のアフガーニスタン・パミール紀行

ビクトリア湖畔

——ワハーン回廊の山・湖・人——

平位 剛 著

A5判 480頁 定価3,800円

地政的理由から永らく外国人の入域が閉ざされていたアフガーニスタン東北部に盲腸のように突出するワハーン回廊へ故マスード将軍に庇護され、1999〜2001年の3年間探検に入った世界的に類を見ない貴重な探検記録。



◎好評発売中!!

定価(本体33,000円+税)

カラコルム・ヒンズークシュ 登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉

宮森常雄(秩父宮記念山岳賞受賞)・雁部貞夫 共著 ・カタログをご請求下さい

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

を超えるのはザラで、10万円をこすものもある。『山の季節』もそのひとつで、これは『山の時刻』

『山の意匠』と並ぶ代表作。元版とは構成が変えてあるが、印刷技術の進歩で文庫版という制約から解放され、田淵行男の世界を味わい、楽しむことができる。実際に疎遠であった人々も、これでその世界に親しめるだろう。土門拳、入江泰吉、星野道夫などの写真文集文庫化のひとつで、ポケットに入れて田淵行男と旅ができ、山に登れるのは豪華。

(大森久雄)

2003年6月 小学館文庫

205頁 838円

『日高山脈の先蹤者 相川修遺稿集』

相川修・著

平成10年に名誉会員に推挙された相川修氏は、12年に逝去(『山岳』第96年「追悼」参照)。

日高山脈開拓期の昭和3年7月にカムイエクウチカウシ山の初登を目指したが、慶應大パーティーに1日先んじられてしまった。神威岳は慶應大が1度、北大が4度挑んだが失敗。5度目に相川氏が

5年7月に挑戦して初登頂に成功。北大在学中に日高山脈の主な山に登り、沢の遡行や冬期登攀に数々の記録を残している。

『北大山岳部部報』『アルプ』『山岳』など多くの著作から13篇を収録。

(高澤 光雄)

2003年7月 99頁 100

0円 連絡先・札幌市北区北7

西6キタノビル (株)北斗警備内

日本山岳会北海道支部

山の版画集『光る山』

松田敏男・著

松田敏男さんが山の画を描き始められたのは1969年、今までに何度も個展をひらき、また画集を出すのもこれで3冊目になる。

画暦も山暦も長い、日本山岳会(京都支部)に入会されたのは比較的最近の1989年のことで、それ以来松田さんにご指導をお願いして、京都支部の画の好きな人

たちによるスケッチ山行が年に数回開催されている。実は、わたしは1度だけしか参加したことがないが、聞くところによるとたいへん好評のようで、これはひとえに松田さんのお人がらによるもので、

そのことはこの画集に収められた67点の作品にも、添えられたいくつかのエッセイにもよくあらわれている。この画集の最後の2点「95年初登山は鈴鹿大峠にてカモシカと見つめあう」「春浅き大峰、朝目覚めて思いを馳せた夜の出来事」はたいへんユーモラスで思わず笑ってしまう。

しかし、この画集の魅力は何といても雄大な山々を正面に見すえた、迫力に満ちた作品群で、それは画家の山を見つめる真剣なまなざしと、版画の技法を巧みに使ったものにちがいない。「五月晴れの槍ヶ岳」「白峰三山の夜明け」などの透明感、「残雪の乗鞍岳」「黎明 赤石岳」などの朝の光が、ようやく稜線に届いたあの感動的な瞬間をみごとにとらえた作品、「光る山」と格闘する画家の姿ものばれて、ひとつひとつの作品を見ながら、自身の経験を重ね合わせて十分に楽しませてもらった。

松田さんはまだ50歳代、これからますます素晴らしい作品を生み出されるだろうと期待している。

(廣瀬 幸治)

図書受入報告 (2003年12月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
佐藤利幸・他(編)	信州大学山岳科学総合研究所年報(第1号)	185pp/30cm	信州大学山岳科学総合研究所	2003	発行者寄贈
京都一山岳部史編集委員会(編)	行手は北山その彼方	292pp/22cm	北山の会	2003	発行者寄贈
三浦雄一郎	高く遠い夢:70歳エベレスト登頂記	245pp/20cm	双葉社	2003	ミッドルフインズ寄贈
中島文夫(編)	70歳エベレスト登頂:三浦雄一郎・豪太父子の8848m	106pp/26cm	双葉社	2003	ミッドルフインズ寄贈
日外アソシエーツ(編)	自然と冒険の旅:読書案内・紀行編	438pp/21cm	日外アソシエーツ	2002	図書委員会寄贈
平位剛	禁断のアフガーニスタン・バミール紀行	487pp/22cm	ナカニシヤ出版	2003	出版社寄贈
廣瀬誠	立山のはなし:佐伯有頼少年像建立記念	130pp/19cm	北日本新聞社	2003	著者寄贈
文部科学省登山研究所(編)	登山研修(Vol.18, 2003)	109pp/30cm	文部科学省登山研究所	2003	発行者寄贈
上田茂春(編)	鳥山房蔵山岳遭難関係文献、及び岳人の追悼・遺稿文献目録	319pp/26cm	鳥山房	2003	購入
Peter Grauss et al.	BERG 2004 (Alpenvereins Jahrbuch Bd.128)	320pp/27cm	DAV, OAV, AVS	2003	発行者寄贈
Wolfgang Heichel	Chronik der Erschließung des Karakorum	336pp/28cm	DAV, OAV	2003	発行者寄贈

2003年7月 東京新聞出版
局発行 2800円

原山智・山本明・共著

『超火山「槍・穂高」』

長野県中央部を故郷とする高校時代からの仲間が北アルプス連峰の地質構造を語る。ライターである山本が、地質学者である原山に語らせる形をとって「地質探偵ハラヤマ北アルプス誕生の謎を解く」という副題が示す通り、山本は凡人代表のワトソンの役をとめて、名探偵ホームズの天才的推理を引き出す脇役に徹する。

北アルプスの山脈形成過程の探究をストリートな学術論文の形で展開されても、一般人には理解がしにくからう。いわば漫才のボケとツッコミの役割分担によって山岳地形と岩石の観察の楽しさを気付かせようとする自然観察入門書の性質が本書にある。

槍・穂高が火山活動の産物だといふ意外な指摘からはじまる。穂高から槍ヶ岳までの山々の地質学的な謎と秘密が実証と推理のたくみな綾によって次々に解かれていく。地表に露出した岩石と、地下

深層の巨大な構造とのあいだの関係を、探偵に擬せられた人の言葉と豊富な写真と図版によって、つまり多数の証拠物件によって明らかにする、という趣向である。

既成の説を疑い、新しい仮説のもとで新説を立てるのは、学術の営みの常であって、本書で展開される新学説が絶対的で究極的な真実と認められるまでには、さらなる手続きと歳月が必要となるに違いないが、私は本書を楽しみつつ読んだ。知的好奇心を触発する読みものであって、研究の結果もさることながら、観察と思考の方法論をとともに考えるための刺激に満ちている。

(宮下 啓三)

2003年6月 山と溪谷社発行
237頁 1500円

『辺境へ』

大谷映芳・著

このようなタイトルがつくと手にとってみたくなるが、そこに住む人たちが自分たちの土地が「辺境」と呼ばれていることを知ったなら、どんな思いだろうと考えると、複雑な気分になるのも事実だ。

著者の手がけるテレビドキュメ

ンタリーは、時間の許すかぎり目にしていたが、それが本になるなら、映像では描ききれないところ、それは取りも直さず人との触れ合いの場だろうと、予測と期待を持って読んだ。

取り上げられている地域はブータン、ギアナ高地、パタゴニア、ドルボ、アフリカのグレート・リフト・バレー、グリーンランド、ヤルツアンポの7つ。そのどれもで濃密な旅を続け、辺境といわれる地で文明とは何かを問い続ける。さらに高度に発達した社会から見ると不自由とも思える人々の暮ら

しを考え、彼の地での交わりを通じて人々の上に思いを馳せる。この種の本にキュメンタリーにありがちな押しつけがましきところもなく、覗き見の姿勢は好ましい。そして、仕事と趣味が一致した人の幸せが感じられる。

写真がほとんど2ページごとに見開きで多用されて、つや消しのカラーがより一層人々の素朴な魅力を引き出しているが、文章が中断されるのがもどかし、その点がやや惜しい。

(泉 久恵)

2003年9月 山と溪谷社発行
239頁 2600円

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。



あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご用意します。

お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ** **ALPS WAY**
<http://www.fellow-travel.co.jp/>
〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスヴィップ渋谷ビル4F
Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300
e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp
〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F
Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986
e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催：株式会社 **フェロートラベル** ボンド保証会員
国土交通大臣登録旅行業664号 協賛：ウェンゲン観光局・ツェルマツ観光局 後援：スイス政府観光局

啓、中野和郎、新妻徹、西信博、西村正晃、野口健、芳賀孝郎、橋本清、橋本勝、長谷川昌美、秦野一彦、原謙一、平井喜久枝、平林克敏、平山善吉、広谷光一郎、深川安明、藤本慶光、古市進、三井嘉雄、三戸部清文、宮下秀樹、宮原巍、宮本数男、宮森常夫、村井龍一、村井田博、村山雅美、山野井武夫、山本晃弘、横山宏太郎、吉永英明、若林啓之助、和田豊司 (小計101万円)

(1口) 石村実、五十嶋一晃、板橋元一、稲垣信生、岩橋崇至、遠藤慎一、大島輝夫、太田敬、大野栄二、岡部みち子、小原晴子、片岡泰彦、向野暢彦、小笹孝、斉藤勝宏、篠崎仁、関清、千田早苗、高沢光雄、田中聡、長坂博、中村靖弘、中村庸男、野口いづみ、馬場勝嘉、藤内英男、藤本勇、本多勝一、宮崎紘一、村上直温、山田圭一、吉田元、吉田宏、渡辺恭三 (小計17万円)

<以上募金額合計：2,230,790円>

●追記 ポカラの国際山岳博物館の開会式は、本年2月5日、タパ首相を主賓に迎え、シュクラ観光大臣、駐ネ神長日本大使等臨席のもと開催された。

日本からは102名 (うち本会会員は芳賀副会長ほか35名) が参加、来賓各位の祝辞等から、博物館の完成は、ポカラ周辺の山岳地域住民のコミュニティー・セ

ンターとしても期待され、ネパールの観光産業の面でも貢献するところが大きいと思われる。

博物館を目標期日までに完成させた安藤久男氏の功績は大きく、野外山岳モデルや、敷地内の園地もほぼまとまり、大森弘一郎会員の大型パノラマ写真も注目を集めた。詳細は次号で報告の予定です。

シニア登山隊

隊員決定と山域変更についてお知らせ 事業委員会

クーンブヒマールの未峰カングリシャール (6811^{メートル}) から、昨年当初計画していた東部ネパールのタンギ・ゴイ・タウ (6938^{メートル}) に変更し改めて挑戦することとなりました。日程も若干の変更があります。

隊員は隊長以下5名 (内女性1名の参加)。今後2月のハヶ岳、3月の西穂高岳と訓練登山を重ね登頂を目指します。

支援トレッキングについても変更になりますので別途ご案内いたします。

ポカラ国際山岳博物館支援募金報告

募金委員会事務局 松田雄一

■募金の経緯

年次晩餐会には、ネパール山岳協会 (NMA) のアンツェリン会長らが、日本からの資金援助に対し謝意を表するために来日し、お陰で、本年2月5日にはグランド・オープン (開所式) を行う運びになったことを述べられたので、ご高承の方もおられると思います。

すでにこの博物館 (以下ポカラ山博と称す) の建設募金については、本会でも平成10年11月には1136万円を、更に翌年5月には181万円を、会員からの募金で協力しており、14年4月からは本会会員、安藤久男氏がJICAの学芸員 (シニア・ボランティア) として赴任して、協力。15年2月には仮オープンを行いました。資金不足のため、同年3月には、NMAより追加資金協力の要請がありました。

■募金委員会の設置

これに対し本会での募金は、同年5月より、本会100周年記念事業募金も始められたので、会を挙げての募金は困難のため、マナスルの当時の隊員ら7名が世話人となって、「日本山岳会ポカラ山博支援委員会」(川喜田二郎代表) を組織し、本会ヒマラヤ登山関係者、役員、委員、評議員、支部長、ネパール観光年記念トレッキング参加者、前回の大口募金協力者などに呼びかけ、募金目標300万円 (1口5000円)、募金期日を同年9月末として、募金を行いました。

■募金の成果と使途

その結果9月末日では、200万円に達したものの、最終的には、2,230,790円の募金にとどまり、募金目標額の74%で、年末をもって募金を締めました。

これに先立ちNMAからの希望もあって、11月10日には、NMAに対し200万円 (US\$18,083,19) を日本山岳会として送金。この資金は、屋外のマナスル・モデルの建設、屋外園地整備、展示室内のディスプレイ等に使用されました。

残額21万円は、ポカラ山博計画の初期の段階に、NMA元会長ダワ・ノルブ氏との約束があった大森弘一

郎会員によるパノラマ航空写真の大型写真20枚の制作費にあてましたが、この制作にはセイコー・エプソン社の協力で、現物寄贈を行うことができました。

■募金の収支

1 募金収入	2,230,790円 — ①
2 支出額	NMA宛送金額 2,000,000円
	エプソン支払い 210,000円
	郵便振替手数料・海外送金料 17,195円
	支出 計 2,275,915円 — ②
3 差引	①—② 3,595円

なお、ご協力いただいた募金者の芳名は次の通りです。記して謝意を表します。

ポカラ国際山岳博物館支援募金者名簿

(平成15年12月末日現在・敬称略)

今西芳子 (30口)、今西邦夫 (30口)、橋本龍太郎 (20口)、安藤久男 (20口)、坂口三郎 (10口)、法政大学山想会 (8口)、日大櫻門山岳会 (8口)、大阪市大OB会有志 (36,000円)、(6口) 石坂昭二郎、斉藤惇生、村木潤次郎、日下田實、藤井信巳、松田雄一、八木原罔明、ポカラ山岳博物館建設募金委員会 (29,790円)、吉村健児 (5口)

(以下4口) 大塚博美、金子宏、神崎忠男、田中文男、法政大学山岳部、宮川良雄 (以上小計1,050,790円)

(2口) 青木巖、青木義明、赤井一隆、赤羽孝一郎 秋山光男、朝比奈英三、浅利欣吉、鯉坂青青、阿部一孝、池永薫璽、石田要久、泉尾忠、市川次良、一力英夫、岩田修二、岩坪五郎、牛木素吉郎、遠藤光男、大石惇、太田晃介、大庭貞江、大橋秀一郎、大森薫雄、岡本丈夫、岡本如矢、荻野昌宏、荻野和彦、奥原敦永、尾崎徳郎、小田知枝、織田沢美知子、尾上昇、河西瑛一郎、上條敏昭、川勝弘一、川喜田二郎、川崎精雄、木崎甲子郎、北林嘉鶴子、吉川暢一、絹川祥夫、木下是雄、木村勝久、熊谷義信、黒川恵、河野之保、小林年、斉藤敏男、三枝礼子、坂倉登喜子、真田幸俊、塩沢厚、芝田稔、杉野目浩、関孝治、高木徹、高田充克、高橋通子、高橋脩、竹内俊夫、竹田寛次、竹中彰、田辺寿、田部井淳子、寺田和雄、土合敦彦、鳥橋祥子、中嶋

会務報告

12月理事会

日時 12月10日18時30分～20時20分まで

場所 日本山岳会会議室

「出席者」平山会長、芳賀、平林、橋本各副会長、藤本、今村、小川、朴元、大蔵、賛田、黒川、鈴木、野口、石田、篠崎各理事、内田、一力各監事、宮崎、鯉坂、小倉(董)、西村、重廣各常任評議員
「委任」田村、鳥居各理事

【審議事項】

1 岡田前評議員の調査申し入れに対する調査委員会の報告と山岳会の処置について 平山会長

本年8月に提出された岡田前評議員よりの調査申し入れに対して、竹内委員長のもとに、宮下、小倉、松田、石橋各氏による調査委員会を設けて11回にわたる調査委員会を開催し、関係者の事情聴取を行ったが、一部不明確な点もあるのでもう少し時間的な余裕をいただきたい。

2 会報「山」原稿修正について

(承認) 篠崎

11月度理事会で別紙の如き会報「山」の扱いについて提案したが、当日会報担当理事今村氏不在につき一方的な話に終わったので再度提案したい。

会報担当の今村常務理事より、「今回の件については配慮が足りず申し訳ない。『山』の原稿の割付けは、入稿状況により決めている。従って字数はその都度編集者が決めている状況であり、ある程度、編集者におまかせいただきたい」旨の発言あり。できる限り、原稿入稿者の意図に気をくばって編集をしていくこととした。(承認)

3 山岳保険の適用範囲の拡大について 賛田

現行の山岳保険の適用範囲をハイキングなどの低山登山にも拡大したいとの提案。

本件に関し黒川理事と提案元の東京海上火災保険(株)と打合せし、その交渉については黒川理事に一人任する。(承認)

【報告事項】

以下の件が担当者より報告され承認された。

1 中国登山協会訪問について

会長

11月15日、中国登山協会を表敬

訪問した。同行者は藤本総務担当理事、神崎元監事。

王宝良主席、李致新副主席、奕開封副主席などと会談し、今後両国の山岳会が直接に話し合い友好関係をさらに深めていくことを確認した。

2 インド山岳会サティア・ダム氏来訪について 黒川

1月25日(日)日本ヒマラヤ協会「新日本ヒマラヤ会議」を開催。

1月30日(金)日本山岳会ルームにて若手会員と懇談。なるべく理事会メンバーの皆さんもご出席いただきたい。

3 海外登山基金申込み期限の延長について 大蔵

12月末が締切り期日ではあるが、今期中に決定するように締切りを2月に延期したい。

4 ガンケル・プンズム中止を読売新聞に申し入れる件 今村

これまでの経緯から、今村理事が読売新聞に正式に中断を伝える。

5 山研利用状況 小川

平成15年は前年に比べ246名減の650名となった。今年は冷夏の影響もあつて減少した。

6 支部の集会への本部からの出席者決定について 藤本

会長、副会長、常務理事で相談して決めていく。

7 2月度理事会日程変更について 藤本

定例理事会が休日のため次のように変更する。

●2月10日(火) 常務理事会

●2月12日(木) 理事会

8 その他

①100周年の募金で1万円では受入れられないと回答をしたケースがあるようだが、問題ではないか。すべての募金が入られるようにしたい。PCの組立てをうまくやり会員100割の募金を目標にする。

②ネパールのNMAの会長らが来日した。2006年5月9日をマナスル・デーとするとの提案があり、マナスル・デーを100周年記念事業に組込むことにした。

記念フォーラム委員会担当



イラスト 宇都木慎一

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆第32回「山岳史懇談会」

図書委員会

創立70周年を迎え、昨年その集大成ともいべき記念誌を上梓した静岡大学山岳部の70年の歴史を山本良三氏に語っていただきます。

日時 4月9日(金)18時30分より

場所 日本山岳会集會室

主題 静岡大学山岳部70年の歴史

講師 山本良三会員

◆第4回高尾の森「植樹祭」

自然保護委員会

ご家族、ご友人お誘い合わせのうえどいぞ。

期日 4月11日(日)

集合 裏高尾小下沢旧八王子キャンプ場10時(高尾北口から小仏行バス15分、日影下車徒歩40分)

持物 作業手袋とお弁当

服装 一般ハイキングの服装で

参加費 5000円(学生2000円)

募集 300名(定員になり次第締切り、申込はお早めに)

申込 氏名、住所、電話、メールアドレスを記入のうえ山川陽一宛(FAX 042-374-7165 メール JAC takaonomori@nifty.com)

期日 4月9日(金)5-11日(日)

場所 銀山平・奥只見丸山(宿舎よりマイクロバス)

宿泊 新潟県六日町国際温泉ユースホテル

集合解散 宿泊地(送迎あり)

費用 2万円(2泊5食懇親会)

申込 3月10日までに会員番号、住所、氏名、年齢、レンタ

ルスキーの要否、交通手段

明記のうえハガキかメール

で野川初江宛(〒275-0014 習志野市鷺沼1-4-7 nogawa9@dc.dion.ne.jp)

*ボーゲン程度以上の方

*実施要領は申込者に別途送付

◆残雪の秀嶺と向き合う山旅

ゆきわり会

会の結成記念に残雪の秀嶺と対面。会員以外の参加も大歓迎です。

期日 4月17日(土)

行程 富士吉田駅9時集合、9時05分出発(バス)→郵便局→鳥居地峠→高座山→杓子山→不動の湯(タクシー)→富士吉田駅歩行約4時間

申込 3月31日までに事務局ゆきわり会メールボックス宛

問合 皆川恵男(TEL 042-373-3003)

問合 皆川恵男(TEL 042-373-3003)

問合 皆川恵男(TEL 042-373-3003)

会員異動

物故

船山 修(7081) 02・3・28

香月慶太(8910) 03・2・26

林 長禎(9941) 03・11・1

坪山淑子(10264) 03・11・23

柴田重太郎(2214) 03・12・5

五十嵐昭市(9026) 03・12・11

金澤守恭(3627) 03・12・12

退会

水沼数馬(2331)

小原 達(5102) 東海

水玉 勇(13330) 東海

ルーム日誌

12月 総務委員会

3日 図書委員会 山岳地理クラブ

5日 JAC01会 02同期会

8日 総務委員会 長期目標検討委員会 アルパインスキークラブ

9日 常務理事会 アルパインスケッチクラブ

10日 理事会 つくも会 休山会

11日 学生会 山の自然学研究会

16日 二火会 九五会 00同期会

17日 図書委員会 山研運営委員会

18日 科学委員会 97同期会 山遊会

19日 事業委員会 インターネット小委員会 フォトビデオクラブ 02同期会

20日 SAN燦会 つくも会

24日 自然保護委員会 百周年記念事業フォーラム委員会

12月来室者 538名

日本山岳会会報 山 705号

2004年(平成16年)2月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 今村千秋

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社